

# Henry James “The Aspern Papers”

## に潜む物語の深淵

——語り手の欲望と遺文の焼失——

The Darkest Abyss in Henry James’s “The Aspern Papers”:  
The Narrator’s Desire and the Loss of the Papers

畑 江 里 美

### 要 旨

故人となって久しい詩人 Jeffrey Aspern について調査する批評家が、数十年前に恋人 Juliana Bordereau に宛てて書かれた書簡をなんとしても手に入れようと画策するが、結局失敗する。“The Aspern Papers”はそのような物語であると、通常、受け止められている。ところで、Henry James は一人称の語りを用いることに対して慎重な考えを持っており、その理由として、一人称の語り手は物語に “the darkest abyss of romance” (AN 320) を忍び込ませるものだと書いている。そうであれば、あえて一人称の語りが採用された “The Aspern Papers” は、積極的にロマンスの深淵が仕掛けられた作品と考えるのがふさわしい。数十年前の出来事である Aspern と Miss Bordereau の関係がどのようなものであったのか、語り手は伝聞としてしか知りようがなく、読者はその語り手を通してしか知りようがない。そのような条件のもとで、読者は何を知りうるだろうか。本稿では、その点について検証し、精神分析の理論を参照しながら、“The Aspern Papers” の新たな読解の可能性を探る。

### キーワード

Henry James, 一人称の語り, loss, 昇華

## はじめに

Henry James の中編“The Aspern Papers”は、とある詩人の遺産である恋文を固守する女性たちとそれを略奪しようとする批評家との間の「抗争」の物語 (Poole 2013 vii) と要約されうる作品だ<sup>1)</sup>。名前の明かされない語り手は、今は亡き詩人 Jeffrey Aspern を崇拝する批評家で、詩人がかつて恋人 Juliana に宛てて書いたという手紙を手に入れるため、手紙を秘蔵しているはずの Juliana/Miss Bordereau とその姪 Tina (初版では Tita) との駆け引きを繰り返すが、ついに果たせず、手紙は Tina の手によって焼失する。すべてが終わった後、語り手は自らの“loss”に思いを馳せて物語を締めくくる。

この loss (損失・喪失・失敗) については、多くの論者が言及してきた。歴史とナラティブの関係に注目する Hillis Miller は、手に入れ損なったのは「パフォーマティヴな行為」(22) によってのみ獲得できる知識であり、それはまた、Aspern が Juliana の恋人として持っていた知識を反復するものであったはずだと論じる (25)。Millicent Bell は、与える者としての Tina の役割をより重視しつつ、Tina との間に Aspern と Juliana の関係の「再現」ができなかったゆえに、語り手は過去の「回復」に失敗したのだと見ている (127)。語り手の Aspern に対する同性愛的傾向に着目する Jeanne Reesman は、Tina を被害者かつ復讐者と位置付け、語り手は Tina を拒絶したために「女性たちの世界」に報復され、「全てを失ったのだ」と述べる (152-153)。歴史家兼物語作者であるという語り手の性質に注目する John Pearson は、歴史家としての語り手は遺文という史料によって「客観的な過去」についての知を「権威付け」しようとして失敗し、代わりに「相対的・主観的・ジェイムズ的な歴史」を記録することになったのだと論じる (56)。また Julie Rivkin のように、語り手のモラルの問題を考察し、遺文を

失うことが逆に「犠牲」の物語という保存形式に結実したのだと、「失うこと」と「得ること」との間のアイロニカルな関係を見出す立場もある(141)。包摂的で不分明な“loss”はさまざまに解釈できるが、語り手自身は一瞬の間において、文書を失ったことであると特定している。これは何を意味するのだろうか。

ニューヨーク版収録に際し James は、語り手が“loss”に言及する末尾の一文に修正を加え、初版の“my chagrin at the loss of the letters becomes almost intolerable.” (“Appendix” in *Aspern* 234) を、“I can scarcely bear my loss—I mean of the precious papers.” (88) へと改めた。ダッシュによって表現される言い淀みは、何らかのより深刻な“loss”があること、そしてそれを語り手が認識しそうで認識していないことを示唆する (Miller 21)。ここで想起されるのは、Freud のメランコリー論である。Freud は、メランコリーにおいては、何らかの愛情対象の喪失があったと想定されるにもかかわらず、「何を失ったのかをはっきり認識することができない」(245) と述べている<sup>2)</sup>。まさに結末の語り手の状態と言える。では、語り手がメランコリーに陥っているのだとすれば、それはなぜなのか。本稿の目的は、語り手の意識から退けられた喪失とは何であり、それがどのように引き起こされるのかを考察することにより、“loss”の新たな解釈を提示することである。そのためにまず語り手が Aspern と Miss Bordereau の関係をどう捉えているのかを検証し、作者による Preface を手がかりとして、Aspern とその文書が語り手にとって持つ意味を検討し、最後に、物語の結末の“I can scarcely bear my loss”が何を意味しうるのか考察する。

## 1. Aspern の詩神

本作品における語り手の“loss”を考える上で忘れてならないのは、James が、まるで「魔術師」のように「そこにはないものを読者に見せてしまう」

ことに秀でた作家 (Nemerov 213) だということだ。Jamesにとって、「文学的呪文 literary spell」によって「幻覚 hallucination」を生み出すことは作家としての「欲望」あるいは「自負」(AN 332)であったし、一人称の語りとは、物語に深淵“the darkest abyss of romance”(AN 320)を忍び込ませるものであった<sup>3)</sup>。“The Aspern Papers”においてMiss BordereauはJulianaでありAspernのかつての恋人であるとする解釈は、実は語り手に依拠しており、それが正当かどうかは決定不可能なのだ。AspernとMiss Bordereauの関係という究極的には当人しか知りえない過去について、語り手は伝聞としてしか知りようがなく、読者はその語り手を介してしか知りようがないからだ<sup>4)</sup>。この作品の解釈は、そうした語りの特徴を前提としたものでなければならない。確かに、語り手はそう信じている。語り手にとって、Miss BordereauがAspernの詩神Julianaであり、自らと詩人Aspernを繋ぐ「生きた媒介者」(Rivkin 137)であることが必須なのである。

AspernはJulianaを讃える詩を書いたという。語り手は、そのJulianaからAspernの遺文を手に入れようとしている。Julianaは“the woman who had inspired a great poet with immortal lines”(54)であり、“some of Aspern’s most exquisite and most renowned lyrics”(15)に讃えられた“divine”(16)な存在だ。ところが、目の前のMiss BordereauにAspernの詩神の面影を見出そうとする語り手の試みは挫かれ続ける。

初めてMiss Bordereauが自分の目の前に現れたことに気付いた時、語り手は“my heart beat as fast as if the miracle of resurrection had taken place for my benefit”(15 強調筆者)と胸を高鳴らせ、“Her presence seemed somehow to contain and express his [Aspern’s] own, and I felt nearer to him”(15)と感じる。だが、実はMiss Bordereauの顔は“horrible green shade”(15)の陰に隠れて見えていない。それに気付いた途端、高揚感は一転して、“some ghastly death’s head lurking behind it”, “a grinning skull”(16 強調筆者)とお

どろおどろしく変化する。だがそれも長くは続かず、我に返ってみれば、  
“Meanwhile she sat there neither moving nor speaking. She was very small  
and shrunken, bent forward with her hands in her lap. She was dressed in  
black and her head was wrapped in a piece of old black lace which showed  
no hair.” (16) である。結局、語り手の目に映ったのは、とりたてて神々し  
くも不気味でもない、こじんまりと年老いた女性の姿ということになる。  
詩に謳われたという Juliana 像と語り手が実際に会う Miss Bordereau 像  
との間には大きな隔りがある<sup>5)</sup>。

ここに並置されている〈復活 resurrection〉と〈死 death〉の目眩くイメ  
ージは、Aspern の見た Juliana を見ることを介して、崇拜する Aspern その  
人と繋がることを切望する語り手が、心の中に思い描いたものだ。だがま  
た Julie Rivkin は、それらはそもそも Aspern の詩に由来するものであると  
指摘し、「Juliana を詩に昇華することにより、Aspern は Juliana の生命を保  
つと同時に奪ったのだ」(137) と論じている。この見解は、他ならぬ Miss  
Bordereau が Aspern (と思われる詩人) の作品について述べる言葉と、ラカ  
ンを経由して響きあう。Miss Bordereau は語り手の言葉じりを捕えて、  
“Inhuman? That’s what the poets used to call the women a hundred years  
ago. Don’t try that. . . There’s no more poetry in the world.” (45 強調筆者) と  
言うのだが、この “inhuman” という語は、ラカンが昇華を論じる際に用い  
る言葉でもあるからだ。

ラカンは『精神分析の倫理』で昇華を取り上げ、女性対象の昇華の典型  
例としてヨーロッパ中世の宮廷愛の詩に言及する。詩に謳われた〈貴婦人〉  
は、「非人格化」(226) され、「非人間的」(228) な、「〈他者〉」であり対象で  
ある位置に置かれ理想化された女性」(247) である<sup>6)</sup>。また、実在の女性ベ  
アトリーチェを詩の中心に据えたダンテでは、彼女が寓意的なものになれ  
ばなるほど詩の言葉はますます官能的となり、「対象としての女性は実体を

奪われ」,「象徴的機能へと変形され」たと指摘する(226-227)。この説明はそのまま,“The Aspern Papers”の物語世界内の実在人物 Aspern と Juliana の関係に当てはめうるだろう。

Miss Bordereau が Juliana であるにしろないにしろ, また, Juliana と Aspern との関係の内実がどうであったにしろ, 詩に謳われた Juliana は昇華された存在であって, 実体としての Juliana あるいは Miss Bordereau とは必然的に異なるものとなる。しかし, どれほど期待と異なっても, Miss Bordereauこそ Juliana であるという語り手の固定観念は揺るがないし, 詩の女性像が理想化され変形されたものだなどとは考えない。このことが示唆するのは, 語り手の思い描く Aspern 像もまた理想化され変形されたものだという可能性だ。

## 2. 作者 James による序文

ニューヨーク版の序文で James は, “The Aspern Papers”の〈萌芽〉として, Byron の恋人だった Jane Clairmont のエピソードを明かす。熱心なシェリー愛好家のアメリカ人が, シェリーの遺文を手に入れるためイタリアに暮らす高齢の Clairmont の邸に下宿するが, 結局目的は果たせず, しかもその失敗には親族の若い女性が関わっていた。同様の情報は James の Notebook にも記録され, こちらでは姪が結婚を交換条件としたことも書き留められている (AN 161-163, *Notebooks* 33)。これが, “The Aspern Papers”についての一般に流通している解釈に大きな影響を与えてきたと考えられる。

James の Preface には, 「創作者」かつ「規範的読者」として, 不可謬の立場から自らの作品の鑑賞法を教える (Pearson 45) という面がある。また, Preface はしばしば「それがなければ読者に気付かれないような要素を明るみに出す」ことで, 一種の「歪み」を作品に加えるという性質も持つ (Bell 121)。“The Aspern Papers”では, 〈萌芽〉についての情報が詳細であること

によって、その傾向が他の作品にもまして顕著になっている可能性がある。James の Preface は、作品と Jane Clairmont をめぐる歴史的事実とを重ね合わせながら読むように読者を誘導しているように見えるのだ。

しかし、Preface はあくまで “The Aspern Papers” という構築物の外側に位置するものであって、物語世界内の歴史を考えるうえでの「内的証拠」とはなりえない。しかも James の Preface は、より多くの資料を求める歴史家と対比して作家の想像力と自由を強調し (AN 161-162)、創り上げられた作品を現実の歴史から切り離してもいる。さらに注目すべきは、Preface が、主要人物をアメリカ人としたことを、大きく話題にすることだ。Aspern と Miss Bordereau が二人ともアメリカ出身であることは、実在の Byron や Clairmont との連関を弱める働きをしてもおかしくないはずだ。

Preface によれば、Aspern を1820年代に活躍したアメリカ人の令名高い詩人と設定したことが、読者から厳しい批判を受けたらしい。批判の核心は、実在のモデルがない——歴史上存在しえないということにあった。James は弁明する。

I find his link with reality then just in the tone of the picture wrought round him. What was that tone exactly, but exquisitely, calculated, the harmless hocus-pocus under cover of which we might suppose him to have existed? (AN 168)

James はまるで開き直るかのようには、物語世界は現実とは別個の構築物だと主張している。さらに James は、Aspern には “a link with the deepest depths of artificial” (AN 168) があり<sup>7)</sup>、 “My last word was, heaven forgive me, that, occasion favouring, I could have perfectly ‘worked out’ Aspern” (AN 169) と述べて Preface を締めくくる。こうした Preface での弁明は、James

がアメリカ人という設定を重要視していたことを示唆し、また、その点に読者の注意を引こうとしているようでもある。これは、国際テーマで著名となっていた作家にとって、大きな意味を持つ判断と見るべきではないだろうか<sup>8)</sup>。

Aspern はアメリカ人であり、語り手もアメリカ人である。実在のバイロンやシェリーとは違いアメリカの詩人であるということは、「興りつつあるアメリカ文学の正典」における「開拓者、独自の天才、国民的英雄」(Savoy 64) であって、連綿と続く英文学の一時期に活躍した詩人たちのうちの一人などではないということだ。語り手は“[Aspern] hangs high in the heaven of our literature for all the world to see; he's a part of the light by which we walk” (4) と述べている。“all the world” と対比される “we” とはアメリカ人のことであろう。Aspern 縁<sup>ゆかり</sup>の品を手に入れようとする行動が、アメリカ文学史に対する大きな使命観を帯びて見えてくる。

### 3. 文書の消滅

Aspern の遺文の獲得という目標への語り手の執着は、相談相手である Mrs Prest に “monomania” (4) と揶揄されるほどだ。語り手は、いかなる “hypocrisy”, “duplicity”, “baseness” も辞さないと言い切り (8), “To make love to the niece” (10) が唯一の方法だと口にする。作戦通りに Miss Bordereau の邸に入り込み、姪 Tina と親しくなり、Aspern への関心を打ち明けて協力者に仕立て上げる。ついに Miss Bordereau の死後、Tina が語り手の望みを叶える申し出をする。困ったことに結婚という交換条件が付くものの、品行正しい未婚女性に求愛 (make love) した以上、想定内の展開ではある。ところが、願望が成就しようというその時になって、語り手はなすすべもなく逃げ出すのだ。これは何を意味しているのだろうか。

むろん、道義的逡巡や Aspern 崇拝に感知される同性愛的傾向といったこ



とも理由ではあるだろう。だがそれだけでは、Tina が “a ridiculous pathetic provincial old woman” (84) と蔑まれるばかりでなく、“the sacred relics” (27) であつたはずの Aspern の遺文までが “a bundle of tattered papers” (84), “Juliana’s crumpled scraps” (85) に変容してしまうことを説明できない。語り手は突然、気が変わったのか。それとも、語り手は実は遺文を欲していなかったのか。語り手が遺文を手に入れようとして法外な金額を費やすことに、Dennis Foster は「欲望の過剰」を看取し、語り手は「稀覯の文書を欲しているつもりでいる」が、実は「何か別のもの、言葉にされない何か」を欲している (74) と述べる。そうだとすれば、いったい何を語り手は欲しているのだろうか。

Eric Savoy は、遺文の「焼失という末路」は物語の早い段階から予期されている、それどころか欲望されてさえいると指摘する (64)<sup>9)</sup>。確かに、遺文の消滅／焼却というテーマは、かなり早い段階から、繰り返し語り手の思考と発話に現れている。最初は、語り手が Tina に Aspern の資料を探していることを打ち明けた後すぐ、Miss Bordereau に呼び出された時のことだ。Miss Bordereau に自分の意図が見抜かれていると感じた語り手は、“[Miss Bordereau] looked terribly like an old woman who at a pinch would. . . burn her treasure.” (42-43 強調筆者 以下同様) と考える。次は Tina との間ではっきりと遺文が話題になった時、語り手は “why shouldn’t [Miss Bordereau] destroy her papers?” (51) と問い、“the principal thing is this—to prevent her destroying the papers” (52) と告げ、“If she shouldn’t intend to destroy the objects we speak of before her death she’ll probably have made some disposition by will.” (52) と言う。Miss Bordereau の容態の急変後、Tina から文書が元の場所から消えたと聞かされ、“she can perfectly have burnt them.” (69) と言う。その夜遅く Miss Bordereau の私室に侵入する時は、“Ten to one the papers had been destroyed” (72) と思っている。Miss Bordereau

の死後、久しぶりに Tina と再会した時は、“ [Tina’s] reticence might very possibly just mean that no relics survived” (77) と考え、“If the old woman hadn’t destroyed everything before she pounced on me in the parlour she had done so the next day.” (77-78) と考える。翌日 Tina から、文書はあるが見せられないと言われると、“I would rather [Miss Bordereau] had burnt the papers outright” (79) と言う。Tina が実は自分が焼却を防いだのだと言うと、語り手は“how did she try to burn them?”, “Did you tell her you’d burn them?”, “Did she believe you had destroyed them?” (79) と問いを重ねていく。Tina は語り手のために手紙を取ってあるのだと認めつつも、それを見せることは拒み、代わりに肖像画を贈り物として差し出すと、語り手は文書のことは“I must renounce.”と言い、もう一度、“I only wish to goodness she had destroyed them” (81) と言う。直ちにヴェニスを離れると言う語り手に対して、Tina が結婚という条件を示し、語り手が逃げ出すのはその直後である。

このように、語り手は Tina に対し繰り返し遺文を要求するのだが、それはいつも同時に、あってはならない事態と言いながら消滅の可能性への言及を伴っている。しかも文書が手に入る可能性に近づくほどに消滅のテーマは執拗に繰り返されるように見える。William Veeder は、「研究者」かつ「紳士」として「文書の焼却などという職業意識に欠け、礼儀に悖る欲望を意識するわけにはいかない」語り手こそが、暗に Tina に文書を消滅させる方法を教えたのだと論じている (32-33)。語り手の内包するそのような矛盾した願望は何を意味するのだろうか。それは、語り手の Aspern に対する欲望のあり方と併せて考察されるのがふさわしい。

#### 4. 語り手と Aspern

Aspern 研究者である語り手は、やはり Aspern を崇拝する John Cumnor

とともに現在の評価の高まりをもたらした最大の功労者だと自負している。詩人を神と呼び、自らを神官になぞらえる心酔と、遺品に対する執着からは、Aspern に対する語り手の同性愛的な欲望が指摘されてきた<sup>10)</sup>。その場合、語り手は Aspern と Juliana の恋愛関係をどう捉えているのか。若き日の Juliana を「ふしだら」な女と想定することで、詩人の「生涯唯一の恋人」から「数多いアヴァンチュールのほんの一例」に格下げしている (Veeder 25) というのは違和感がある。それでは Juliana を讃えた Aspern その人の詩を貶めることに通じ、Aspern の名声を高めることを使命とする語り手の振舞いとして奇妙だからだ。語り手にとって、Juliana/Miss Bordereau は自らと Aspern とを繋ぐ貴重な「媒介者」のはずである。語り手はむしろ、「Miss Bordereau を手ひどく遇したという告発」から Aspern を守ろうとしている (Reesman 153) のではないか。

第一節で、語り手は、自分の関心は詩人の功績を正しく讃えることだけだと語り、Aspern の生涯に名声を傷つけるような汚点は一切ないと断言する。

He had nothing to fear from us because he had nothing to fear from the truth, which alone at such a distance of time we could be interested in establishing. . . (5)

次いで、Aspern の名声を危うくする女性関係の噂があったことを認めた上、それを一つ一つ語り手と Cumnor は晴らしてきたと語る。

Each of these cases Cumnor and I had been able to investigate, and we had never failed to acquit him conscientiously of any grossness. (5 強調筆者)

ところがこの時、Aspern を賛美し自負を語るその合間に、ちらりと内情が漏らされる。まず、“His early death had been the only dark spot, as it were, on his fame, unless the papers in Miss Bordereau’s hands should perversely bring out others” (5 強調筆者)、そして、“I judged him [Aspern] perhaps more indulgently than my friend [Cumnor]...” (5 強調筆者) と語り手は言う。ここには重要な情報が示されている。Miss Bordereau の文書には Aspern の名声を危うくする可能性があるという認識を語り手が持っていること、そして、語り手と Cumnor の見解には微妙な齟齬があるということだ。(注意すべきは indulgently という語の使われ方である。語り手は、不品行を許容する寛容さではなく、grossness はないと判断する際の基準の甘さを指して使っている。)

続けて語り手は、“Half the women of his time, to speak liberally, had flung themselves at his head, and while the fury raged. . . accidents, some of them grave, had not failed to occur.” (5) と、往時の女性たちの熱狂ぶりに触れる。数々の女性関係のスクandalを引き起こした Byron を想起させる叙述だ<sup>11)</sup>。次に、語り手は Aspern の「声」の魅力に言及した後、Aspern と女性たちを“Orpheus and the Maenads!” (5) になぞらえる。『変身物語』によれば、エウリュディケを冥界に失ったオルフェウスは、女性に全く無関心だったためにマイナデス (バッカス信者の狂乱状態の女たち) の怒りを買ひ、八つ裂きにされたという (上 111-113)<sup>12)</sup>。つまりこの比喻によって語り手は、Aspern の女性関係は Byron とは違い清廉であると主張していることになる。語り手の観点では、Aspern という“divine poet”は“one of the most brilliant minds of his day”だけでなく“one of the most genial men and one of the handsomest” (5-6) なのだから、女性たちがマイナデスのように一方的に熱を上げたのも当然なのだ。

語り手は、Aspern にはいかなる grossness (不適切な行動) もないと主張している。だが、語り手にとってそれは何を意味するのか。Aspern と Miss

Bordereau の間に性的関係があったとすれば、*The Ambassadors* の Strether 同様19世紀のアメリカ人であり、しかも Aspern を正典に高めたい語り手であれば、およそ容認しがたい事態ではなかろうか。確かに語り手は Miss Bordereau を Aspern の “mistress” と呼び (33)、Aspern を Miss Bordereau の “lover” と呼んでいる (9)。今日ではもっぱら性的関係を前提とする語だが、語り手がそのように使っていると断定はできない<sup>13)</sup>。mistress は “A woman who has command over a man’s heart; a woman who is loved and courted by a man”, lover は “One who is in love with, or who is enamoured of a person of the opposite sex” という意味にもなるからだ (OED)。語り手は Juliana と Aspern を、想像の中でロミオとジュリエットのバルコニーの場面に重ねていた (33) が、バルコニー越しに愛の言葉を交わすだけの間柄にも当てはまる曖昧な語を語り手は使っている—— James が使わせている——のだ。

アメリカ文学史の先駆者を讃えるという目標のためには、その生涯は清廉潔白であったと示さなくてはならないと語り手は考えている。grossness はないと証明するとは、そういうことなのではないか。ここで、Cumnor がイギリス人に設定されていることに隠れた意味があるように思えてくる。この人物には国籍以外に格別の情報が与えられていないだけになおさらである。Aspern と同時代の詩人たちが、パイロンをはじめ、スキャンダルと無縁でないことを受け入れているであろう彼は、語り手とは異なり、Aspern のアヴァンチュールが発覚しても、そのせいで崇拝する詩人の価値が下がると思わず、grossness について殊更 indulgently に判断する必要もないということである。Cumnor がイギリス人と設定されているのは、grossness に対する語り手特有の拘りを際立たせつつ相対化し、ひそかに皮肉な光を当てるためなのではなかろうか。

語り手は、批評家として Aspern についての真実を明らかにすることが自

分の使命であり、また Aspern に明らかにされることを恐れる点などないと表明していたが、しかし明らかにされるべき真実とは Aspern の高潔さであり、逆に汚点は暴露されてはならないということになる。だからこそ、Miss Bordereau に関する事柄は “the most difficult episode to handle” (6) と見なされている。物語の始まりの時点で Miss Bordereau の文書は未調査であり、従ってそこから新たに不都合な真実が明らかになる危険をはらんでいるからだ。そのように考えると、語り手の Aspern の文書に対する相矛盾する願望が説明できそうだ。

## 5. 文書のはらむリスク

Miss Bordereau が秘蔵している文書は、Aspern のものである限りにおいて、語り手にとって二重の価値を持っている。まず、Aspern を神と崇める信奉者としての立場からは、神の言葉の記された聖遺物である。それを所有することは、神官としての威信をいやがうえにも高めるだろう。さらに、遺文は偉大な詩人の貴重な伝記的資料でもある。たゆまぬ努力によって Aspern の真の姿を明らかにする批評家としての立場からは、文書はそれまで曖昧だった点に光を当て、Aspern の名声をさらに高めるはずのものであり、またそうでなくてはならない。だから語り手は文書をぜひとも入手しようとしているし、Miss Bordereau は Juliana でなければならない。

しかし、語り手が文書を所有することには、実は隠れた問題がある。Miss Bordereau は遺文を秘匿していたようだが、語り手がそれを入手した場合、そうはいかない。文書には、“such immense interest to the public, such immeasurable importance as a contribution to Jeffrey Aspern’s history” (51) があるからだ。威信のためには、遺文の所有を周知する必要があるし、また批評家として、資料の内容を公表する責任がある。さもなければ批評家としての信用に係わるだろう。ここに語り手のジレンマが生じる。内容不

明の文書を手に入れることは危険を伴う。それどころか内容を知ること自体が危険をはらんでいるのだ。文書が “*perversely bring out [dark spots in Aspern's life]*” (5) ということになりかねないからである。

語り手の潜在的な危惧は言葉の端々に現れる。計画が軌道に乗り始め、手紙を話題にできるほどに Tina と親しくなった頃、Tina が Miss Bordereau は手紙をととても大切にしていると言う。すると語り手は “*In spite of their being compromising*” (50) と問いかけ、怪訝そうな Tina に、 “*You mean there's nothing to affect her reputation?*” (50) とさらに問う。Tina が戸惑ったように “*Do you mean she ever did something bad?*” と問い返すと、語り手は “*Heaven forbid I should say so*” と一応打ち消すのだが、すぐに “*if she did. . . that was in other ages, in another world*” と付け加え、 “*But why shouldn't she destroy her papers?*” と言う (50)。破壊のテーマの提示である。語り手が考えるように、この時 Tina が “*of a yielding nature and capable of doing almost anything to please a person markedly kind to her*” (50) であるならば、計画は成功に大きく近づいているはずなのに、語り手は “*but the greatest kindness of all would be not to presume too much on this*” (50) と、計画の遂行を自ら抑えるようなことを考える。Tina は文書が評判を汚すものでありうるとは思いつかなかった様子だが、語り手はもちろんそうではない。語り手の本来の懸念は、話題になっている Miss Bordereau ではなく、Aspern の評判であるはずだ。だが語り手はそれを認識するわけにいかないのである。

つまり語り手は表面上、Aspern の潔白を確信している立場にあり、その確信の正しさを裏付ける貴重な新資料であるはずの Aspern の私信を入手し公表することで、Aspern の真の姿を広く世間に知らしめたいと考えている。だが、文書の内容が全く別の結果をもたらす可能性をどこかで感じてもいる。その鬨ぎ合いから、是が非でも文書を手に入れたいと公言しつつ

も、その消滅について言及してしまうという矛盾した行動が生じていると考えられる。危険の感覚は、語り手の計画が進展し成就に向かって近付くほどに高まり、頂点に達するのが、Tina が事実上、結婚と引き換えに文書を譲るという申し出をする時だ。

Tina の条件は、文書の授受を婚姻という対価と結び付ける。Hillis Miller は「語り手が Tina の夫として得たであろう知識は、Aspern が [Juliana の恋人として] 持っていた知識の反復であったろう」(25) と指摘している。語り手が自分と Tina の関係を Aspern と Juliana の関係に重ね合わせていた(33) ことを踏まえると、Aspern から Miss Bordereau への文書の授受もまた、婚姻と結び付くべきものと認めることが迫られているのではない。結婚とは、語り手の属する社会で紳士が未婚の淑女に「求愛 make love」したり、熱烈な愛の詩を捧げたりしたならば、いわば当然に期待される帰結であろう。ロミオとジュリエットが愛の言葉を交わした後に続くのは、結婚と寝室の場面だったのではないか。Tina の示した対価の重さが、文書のはらむ知識の危険性の高さの暗示になったとすれば、語り手は、文書の内容を知<sup>る</sup>はおろか、危険を認<sup>識</sup>す<sup>る</sup>ことさえ避けなければならない。

混乱状態で Tina のもとから逃げ出した語り手は、その日のその後のことはよく覚えていないと語る(84)。但し、自分の振舞いを正当化しようとしつつも、Tina の気持ちをひどく弄んでしまったのではないかと良心の呵責に苛まれていたことは覚えている。では語り手は何を思い出せないでいるのか。語り手の Tina に対する振舞いに責められるべき点があるとするれば、それとパラレルな関係にある Aspern の Juliana に対する振舞いもまた責められるべきだということにはならないのか。この時の混乱した意識の中で問われかかっているのは、Aspern の Juliana/Miss Bordereau に対する道義的責任なのではないだろうか。



## 6. Aspern 像の揺らぎ

物語も終わりに近いこの段階で、語り手の Aspern に対する賛美の念に揺らぎが生じていることは、語り手の想像の中に現れる Aspern 像に変化が起きていることに窺える。語り手が逃げ出すに至る Tina との会話の過程で、語り手は 2 回、助言を求めるように手元の肖像画を見るのだが、その時の Aspern はそれ以前とは大きく異なっているのだ。

ヴェニスに滞在中、語り手は Aspern の存在を極めて身近なものと感じていた。

I had invoked him and he had come; he hovered before me half the time; it was as if his bright ghost had returned to earth to assure me he regarded the affair as his own no less than as mine and that we should see it fraternally and fondly to a conclusion. It was as if he had said: ‘Poor dear. . . aren’t we in Venice together, and what better place is there for the meeting of dear friends? See how it glows with the advancing summer. . .’ (27 強調筆者)

このように Aspern は、語り手の想像の中で、語り手を見守り鼓舞する情愛深い友人であり、全面的な支援者である。Aspern のために尽くすことは、ひいては芸術に貢献することとだと、語り手は全ての芸術家との “mystic companionship” や “a moral fraternity” (27) さえ感じている。ここには Aspern に対する傾倒と信頼に満ちた一体感がある。

ところが、Miss Bordereau の死後に Tina と会う場面の Aspern からは、そのような親密さや支援は感じられない。語り手は、この日 Tina と会うことに初めから漠然とした不安を抱いていたのだが、Aspern のもの（とされ

る) 肖像画を差し出され, “you’ve made a great difference for me” (80) と感謝の言葉を述べられて, いよいよ怖れをなし, 相談するように手元の肖像画を見る。ところが Aspern の顔は嘲るような笑いを浮かべるばかりで, むしろ語り手の困惑をおもしろがってさえいるようなのだ。

I but privately consulted Jeffrey Aspern’s delightful eyes with my own—they were so young and brilliant and yet so wise and so deep: I asked him what on earth was the matter with Miss Tina. He seemed to smile at me with mild mockery; he might have been amused at my case. I had got into a pickle for him—as if he needed it! He was unsatisfactory for the only moment since I had known him. (80 強調筆者)

始まりの Aspern の目の描写には語り手の信頼と期待が込められているが, その後の顔の表情の描写になると, その期待が応えられていないことが窺える。Aspern に対する一体感にひびが入ったのである。

この後, さらに会話が続き, ついに Tina が遠まわしながら結婚という条件を持ち出す。Tina の意図が徐々に明らかになるにつれ, ますます危機感を募らせた語り手は, Aspern の肖像に助けを求める。

[Tina’s words] gave me the impression of a subtlety which at first I failed to follow. But after a moment her face helped me to see further, and then the queerest of lights came to me. It was embarrassing, and I bent my head over Jeffrey Aspern’s portrait. What an odd expression was on his face! ‘Get out of it as you can, my dear fellow!’ (82 強調筆者)

ここでは Aspern は信頼すべき導き手ではなく, むしろ語り手を惑わし, 道

を誤らせる不埒なトリックスターのようだ。切羽詰まった語り手は肖像画から聞き取った通りにその場から逃げ出すのだが、献身的に尽くしてきた Aspern から思いがけない冷遇を受け、もはや語り手は信頼や安心を感じることはできない。このような愛情対象に由来する「冷淡さ slight」はメランコリーの要因の一つでもある (Freud 249)。Aspern の表情も声も、むろん語り手の想像による活喩であるが、この時に精神的な繋がりは絶たれ、これ以降、活喩は成立しなくなったようである。その後ヴェニス<sup>1</sup>の街をさまよう語り手が憶えているのは、傭兵隊長 Bartolommeo Colleoni の巨大な銅像を、啓示を求めて見つめていたことだけだ。もはや Aspern は助言を求める相手ではない。

ここでは、理想化されていた Aspern の姿が突然、好ましくないものに変化し、語り手の不安を掻き立てている。ここで再びフロイトを想起すれば、これは〈不気味なもの〉の出現、すなわち内奥に隠されていたものの出現ではないだろうか。語り手が目指していたのは、Aspern の名声を広く世に知らしめることであり、Aspern が“divine”な Juliana を讃え、“immortal lines” (54) によって後世に伝えたのと同じように、“divine”な Aspern の名を後世に伝えることだった。Aspern に尽くすことは芸術に尽くすことであり、それが文筆家として Aspern の衣鉢を継ぐ者という自負を支えていた。だが、そのための行動が実は同時に Tina に対する不謹慎な振舞いであり、しかも、他ならぬ Aspern の Juliana に対する振舞いをなぞるものかも知れないと認めるのは、語り手にとって大きな困難であるはずだ。Jean Michel Rabaté は、〈不気味なもの〉の出現は〈昇華〉の失敗と関係しており、深い情動が十分に表出されないまま埋もれ忘れられてしまう時に現れるものだと論じている (92)。Aspern という偉大な先駆者に対する語り手の疑念は、はっきりと表面化せずに埋もれ忘れられてしまったというのが、語り手がその日のことはよく覚えていないということの内実ではないか。

## 7. 物語の結び

語り手は、物語“The Aspern Papers”を語り終える。それは、崇拜する詩人の遺した文書を求めて旅をし、ひっそりと暮らしていた詩人のかつての恋人に出会うことはできたものの、文書が永遠に失われるのを防ぐことはできなかったという、達成されなかった探索の物語だ。Tinaから託されたAspernの（とされる）肖像画は、語り手の机の上方に掲げられている。執筆活動にいそしむ時は、いつでも目にすることができる位置だ。物語の終わりで語り手は述べる。

When I looked at it I can scarcely bear my loss — I mean of the precious papers. (88)

「ほとんど耐えられない」なのか、あるいは、「少しは耐えられる」なのか。確かに、語り手の当初の計画は一定の成功を収めたとも言えるだろう。文書は手に入れ損なったが、肖像画という“the sacred relics” (27) の一つは手に入れることができた。また、Miss Bordereauの手元にあった（とされる）遺文の消滅によって、「汚点が明るみになる」恐れはなくなり、「Aspernの生涯に真実を知られて困る点などない」という語り手の主張を覆すものは、もはや存在しない。AspernがJulianaを讃え昇華したように、語り手はAspernを讃え昇華した。物語世界に、詩人Aspernは“a distinguished presence” (AN 168) として確かに存在している。

だが、末尾の文には、言い淀みがある。語り手は、lossを惜しんでいるが、「何を失ったのかをはっきり認識することができず」(Freud 245)にいる。語り手はAspernの名声を守るために密かに文書の消滅を願い、それとなく促してさえたのだった。それは実は、「Aspernの生涯に真実を知ら

れて困る点などない」という自らの主張を裏切ることであり、偉大な先駆者に対する信頼の不完全さを露呈することである。語り手が失ったのは単に文書という artefact ではない。真に失われたのは、敬愛する Aspern との満ち足りた一体感であり、Aspern に対する全幅の信頼であり、研究者としての矜持であり、文筆家としての拠所である。これはアイデンティティの危機だ。だが、メランコリーにあっては、「愛情関係」は断念されない。「愛情対象への強い固着」ゆえに、「対象とのナルシス的な同一化」が起きるが、その時、自我はあたかも「見捨てられた対象」となり、「対象喪失」は「自我喪失」へ変質するという (Freud 249)。語り手は何が失われたのかをはっきり認識しないままである。Aspern 文書をめぐる一連の出来事を語り終える時、掲げられた肖像画を見ながら語り手が思いを馳せるのは、Aspern でも芸術の伝統でもなく、失われたもののことだ。語り手を Aspern と繋ぐ聖遺物を入手したはずであるというのに、そこに語り手の視線を受けて応えるものはなく、もはや想像の中にすら霊的な交わりを感じることはできない。

#### 付 記

本稿は、日本英文学会第89回大会（2017年5月20日、於静岡大学）での口頭発表に加筆修正したものである。

#### 注

- 1) 特に記した場合を除き、本稿はニューヨーク版を底本とする Oxford World's Classics 版に依拠している。
- 2) Freud からの引用は英語版に基づき、和訳に際し日本語版を参照している。
- 3) James の用語で “romance” とは、「現実から遊離した想像力の産物」(Bell 122) つまり虚構としての物語を指す。
- 4) Aspern と Miss Bordereau の関係については Richards が、Miss Bordereau のアイデンティティについては、別稿「ミス・ボルドローとは何者か」(畑江

- 2017) で詳しく論じている。Aspern と Miss Bordereau の親密さを示す物的証拠は、遺文と肖像画である。しかし遺文は内容不明なうえ、そもそも語り手の目に触れないため実在性すら定かではない。Miss Bordereau が確かに所有していた肖像画についても、Miss Bordereau は描かれた人物について “a likeness of a person you don't know by an artist who has no reputation” (59) と言うのみで、それを Aspern だと決め込んだのは語り手である。
- 5) 語り手は、Miss Bordereau が金銭的に極めて貪欲あることにも、不満と違和感を覚えている (畑江 167)。
  - 6) 原文で「非人間的」は “inhumain” (180) である。
  - 7) “the darkest abyss of romance” (AN 320) のパラフレーズと読める。
  - 8) Aspern のアメリカ性については、Hawthorne の影響と結び付けて論じられてきた。作中で語り手が Aspern の時代に思いを馳せる場面での語り口が James 自身の Hawthorne 論と響きあうほか、Hawthorne をめぐる史実にも Aspern と似通う点があることが指摘されており、James に対する Hawthorne の影響は無視しえないものであろう (Bell 122-124, Reesman footnotes 2 を参照)。しかし本稿で考察したいのは、Aspern がアメリカ人であることによって、同じくアメリカ人である語り手に生じる意味である。むろん作中人物である語り手の特性は、作者 James のそれと同一視されるべきものではない。
  - 9) デリダのアーカイヴ論を参照する Savoy は、物語の欲望と語り手の欲望は区別されるものだが、この作品では二つが時として一致しているようだと言っている。だが、語り手が物語世界内の重要な行為主体でもある “The Aspern Papers” の場合、物語の欲望と語り手の欲望とは区別しきれず、むしろ、遺文の破棄を欲することはもともと語り手に潜んでいたと考えるべきではないか。本作品をアーカイヴ論と結び付ける論考には、他に Andrew Hewish のものがあり、アーカイヴにもともと備わる「無アーカイヴ機能 the anarchic function」が語り手を介して成就した (260) と論じている。
  - 10) Miller (23), Hadley (317), Reesman (152), Veeder (27) など。
  - 11) “The Aspern Papers” が執筆された1887年当時、Byron については、Harriet Beecher Stowe の *Lady Byron Vindicated* (1870) の出版により、女性遍歴のみならず異母姉との近親相姦の関係も広く知られていた (Snyder 134) と指摘されている。
  - 12) 同書には、オルフェウスが女への愛を絶ち、少年を愛したという記述もある (63)。
  - 13) “The Aspern Papers” を論じる場合、Miss Bordereau を「Aspern のかつての恋人」(Poole xii) と見なすのが一般的である。性的関係の有無については、

「推定上の情事」(Miller 21) と慎重な見方がある一方で、「Aspern が性と詩作において高みにあった時期の熱烈な情事」(Veeder 27) を前提とされることもあり、解釈上の合意がなされているとは言い難い。

#### 引用文献

- Bell, Millicent. “The Aspern Papers: The Unvisitable Past.” *Henry James Review* 10 (1989): 120-127.
- Foster, Dennis. *Sublime Enjoyment: On the Perverse Motive in American Literature*. Cambridge UP, 1997.
- Freud, Sigmund. “Mourning and Melancholia.” *The Standard Edition of the Complete Psychological Works of Sigmund Freud, Volume XIV* (1914-1916): 237-258.
- Hadley, Tessa. “The Aspern Papers: Henry James’s ‘Editorial Heart.’” *Cambridge Quarterly* XXVI (1997): 314-324.
- Hewish, Andrew. “Cryptic Relations in Henry James’s ‘The Aspern Papers.’” *Henry James Review* 37 (2016): 254-260.
- James, Henry. *The Art of the Novel: Critical Prefaces*. New York: Charles Scribner’s Sons, 1950.
- . *The Aspern Papers and Other Stories*. Ed. Adrian Poole. Oxford: Oxford World’s Classics, 2013.
- . *The Complete Notebooks of Henry James*. Ed. Leon Edel and Lyall H. Powers. New York: Oxford UP, 1987.
- Lacan, Jacques. *L’éthique de la psychanalyse, 1959-1960. Le Séminaire de Jacques Lacan*. Texte établi par Jacques-Alain Miller. Paris: Seuil, 1986.
- Miller, J. Hillis. *Literature as Conduct: Speech Acts in Henry James*. Fordham UP: New York, 2005.
- Nemerov, Alexander. “James as Magician: Deception and the Moment of Truth.” *Henry James Review* 34 (2013): 213-219.
- Pearson, John H. *The Preface of Henry James: Framing the Modern Reader*. The Pennsylvania State UP, 1997.
- Poole, Adrian. “Introduction.” *The Aspern Papers and Other Stories*. Ed. Adrian Poole. Oxford: Oxford World’s Classics, 2013.
- Rabaté, Jean-Michel. *The Cambridge Introduction to Literature and Psychoanalysis*. New York: Cambridge UP, 2014.

- Reesman, Jeanne Campbell. "The Deepest Depths of the Artificial: Attacking Women and Reality in "The Aspern Papers."" *Henry James Review* 19 (1998): 148-165.
- Richards, Bernard. "How Many Children Had Juliana Bordereau?" *Henry James Review* 12 (1991): 120-128.
- Rivkin, Julie. "Speaking with the Dead: Ethics and Representation in "The Aspern Papers."" *Henry James Review* 10 (1989): 135-141.
- Savoy, Eric. "Aspern's Archive." *Henry James Review* 31 (2010): 61-67.
- Snyder, Katherine V. *Bachelors, Manhood, and the Novel 1850-1925*. Cambridge UP, 1999.
- Veeder, William. "The Aspern Portrait." *Henry James Review* 20 (1999): 22-42.
- オウイディウス『変身物語』(下) 中村善也訳, 岩波書店, 1984年。
- 畑江里美「ミス・ボルドローとは何者か—「アspan文書」と、想い・描かれ・訪れ得る過去」, 『人文研紀要』第87号, 2017年, 143-171。
- フロイト「喪とメランコリー」伊藤正博訳, 『フロイト全集 14巻 不気味なもの; 快原理の彼岸; 集団心理学: 1914-15年』新宮一成他訳, 岩波書店, 2010年。
- ラカン, ジャック『精神分析の倫理』(上)(下) アラン・ミレール編, 小出浩之, 鈴木國文, 保科正章, 菅原誠一訳, 岩波書店, 2002年。